

台中日本人学校における国際理解教育の推進

— 現地社会・学校との交流を通して —

前台中日本人学校 教諭

福岡県大野城市立大野東中学校 教諭 平野 善浩

キーワード：現地理解教育資料，現地校への体験入学，職場体験

1. はじめに

毎年、旧正月明けの満月の夜に、台南のある町ではロケット花火が飛び交う祭りが開催される。最初は半信半疑でそのお祭りに参加した。しかし、実際に目の前に数千発のロケット花火が備え付けてある祭壇(?)が目の前に現れ、それに点火されるとロケット花火が本当に自分の方をめがけて飛んでくる。私が小学校の頃に「ロケット花火は絶対に人に向けては打ってはいけません。」という話を大人から聞いた。それは私の心の絶対的な決まりごととなっていた。しかし、ロケット花火はそんな自分勝手に作った決まりごとを無視して飛んでくる。しかも1発ではなく数千発である。もちろん痛いし、煙たい。目の前の女の子が倒れた。ゴミにロケット花火の火が引火して火事になっていた。ロケット花火に当たれば当たるだけ御利益がある。すごい祭りである。

自分の思考範囲外のことが起こると、様々なことを考える。こんな祭りは日本ではやらない。いや、やれないし、やろうとする人もいない。とても危険だし、消防法などの法律的にも無理であろう。しかし台湾ではこんな祭りが盛大に行われている。台湾人の激しさ、おおらかさ、そして独自の宗教観……。異質なものに触ればふれるほど、それはなぜか知りたいと思うし、また、自分自身や日本のことも振り返ることができる。交流をすることで人は大きく成長していくものだと思う。台中日本人学校の子どもたちにおいても異文化との交流を通して成長していく姿が数多く見られた。その実践内容を報告したいと思う。

2. 台中日本人学校について

台中日本人学校は、台北、高雄に続く、台湾で三番目の日本人学校として、1977年(昭和52年)に開校した。しかし、1999年(平成11年)9月の台湾中部大地震により、校舎が倒壊した。様々な機関の協力を得て、2001年(平成13年)より市の中心から約10km離れた現在の校舎に移転している。



全校児童生徒と職員(平成21年4月)

生徒数は小学部の児童が130名、中学部の生徒が26名の合計156名(平成21年度)である。台湾の日本人学校では台北日本人学校に続く二番目の規模の日本人学校となっている。

台中日本人学校の大きな特色の一つとして、約半数の児童・生徒が「国際結婚家庭」であるということがあげられる。教室では、中国語、台湾語、日本語を流暢に話すことができる児童・生徒が多く見られる。しかし、小学部低学年では、入学時での日本語の理解力が不十分な児童への指導や、友達との会話で中国語を使う児童への指導などの課題がある。また中学部の生徒に対しては、進路指導の際に、台湾の高級中学校(台湾の高校)に進学する生徒への指導などの課題にも取り組んでいかなければならない。

私はこの台中日本人学校で派遣1年目は小学部4年生を、派遣2,3年目は中学部2年生を担当した。

3. 台中日本人学校における教育実践

(1) 現地理解教育資料の作成

台中日本人学校では現地理解教育の資料として「私たちの台中」という、主に小学部の社会科の学習を進める際の副読本が作成されていた。それに加え、教育活動全般で活用できる現地理解教育資料を現地理解教育委員会のメンバーを中心に作成することになった。この資料は台湾の地理、歴史、産業、教育、食文化、音楽、年中行事などの全10章から構成され、小学部4年生以上にはすべて配布される資料である。

① 取材旅行

私は食文化の担当となった。取材旅行に行く前に台湾の食文化の多様性を調べてから取材に当たった。

派遣1年目の夏休みに、現地と交流しながら取材しようと思い、自転車旅行を実行した。台中から食べ物がおいしいと言われる「台南市」と「高雄市」へ、35度を超える炎天下に自転車に向かって。途中、小さな町で宿泊することとなったが、宿泊するところがない。困っているところでお寺の参拝者用の宿に無料で泊ってもらったり、日本統治時代に日本の教育を受けたおばあさんからピーナッツをもらったりと自転車ならではの交流もできた。取材しながら台湾の大きさや文化を肌で感じる事ができた取材旅行であった。

著作権の問題もあり、資料に載せる写真はすべて自分で撮った資料でなくてはならない。できるだけたくさん食べ、そして飲んで自分で味わい、台湾独自に発達した台湾料理を始め、中華料理、日本統治時代に伝わった味噌汁やもちなどの写真資料を集めることができ、とても有意義な取材旅行だった。

② 現地資料の活用

多くの職員の努力の甲斐あって、台中日本人学校2冊目の現地理解教育資料「ニーハオ台湾」ができあがった。資料ができた年から、教職員に「ニーハオ台湾」を活用した授業を必ず実践してもらい資料を残すことにした。これからの現地理解教育の財産になるように、活用した学年、単元、指導略案を活用実践事例集にまとめた。

現地理解資料は写真やデータが古くなると活用が難しくなる。そこで4年ごとに古くなったデータや写真を更新して、社会科副読本「わたしたちの台中」、現地理解教育資料「ニーハオ台湾」が常に活用できるようなシステムを作り上げることができた。

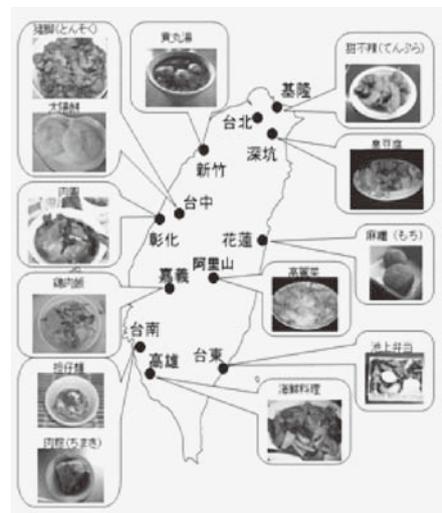
(2) 現地校への体験入学

台中日本人学校の中学部2年では毎年11月に台中市にある私立の新民高級中学校の附属の中学部（1学年5クラス）に1週間体験入学をする取り組みが続いている。この高校は台中日本人学校からも毎年数名の入学者を出しているつながりの深い学校である。

この体験入学の目的としては「台湾の中学校の実情を知り、台湾の生徒と交流すること」である。そして、台湾の高級中学校に進学するか、日本の高校に進学するかを迷っている生徒もいることから、「進路決定の際の判断材料を収集する」という目的もある体験入学である。

① 事前のうちあわせ

台湾の新学期が始まる9月より打ち合わせを始め、中国語や英語の能力、そして生徒の進路の希望を考慮し、中学部2年生の生徒（7名）を5つのグループに分けることから始まった。台湾の高級中学校への進学を考えているものや中国語の能力が高い生徒はできるだけ一人でクラスに入れ、コミュニケーション能力に不安がある生徒は日本語コースに入れるなど、個人の適正に応じたクラス分けを行った。また、前年度の反省も含め、生徒の体験が有意義になるように現地校の教務主任と綿密に打ち合わせを行った。



現地理解教育資料
「ニーハオ台湾」の一部

体験の1ヶ月前には、実際に使用するテキストと日誌、そして現地校の給食を食べるための弁当箱も送られてくる。生徒は教科書の内容を見て、その難しさにかんがりの焦りを感じ始める。

② 現地校について

日本人学校と現地校の大きな違いは次の通りである。○1日9時間授業 ○ハイレベルの学習内容 ○生徒の高い英語のコミュニケーション能力 ○20分の昼寝 ○頻繁に行われるテスト ○1クラス45人

特に生徒は1日に9時間も授業があることに不安を覚える。全く知らない環境、しかもコミュニケーション能力に不安があるなど、体験前は期待と不安が入り交じって、どちらかというに行きたくないといった消極的な考えの生徒もいた。

③ 体験入学の様子

体験初日、すぐに台中日本人学校の生徒に大きな試練がやってくる。新民高級中学と中学部あわせて五千人の前で挨拶をすることである。日頃少人数の中で学校生活を送る日本人学校の生徒たちは運動場いっぱい広がる今までに見たこともない生徒の多さにかんがり精神的プレッシャーを感じたようだ。新民校の校長先生から紹介され、一人一人中国語で挨拶をした。日本人学校の生徒は練習した甲斐もあり、スムーズに挨拶をすることができた。また、その挨拶によく反応してくれた新民校の生徒たちにも助けられた。それから彼らは1週間を過ごすクラスに案内され、体験入学が本格的に始まった。

日本人学校の生徒は、授業が中国語で行われるため理解し難く、小テストも難しくほとんど点数がとれない。中国語、英語が不得手な生徒は、どうコミュニケーションしたら良いのかわからず、生徒は疲労困憊状態である。しかしそのつらい状況は体験が始まって3日目で大きく変わり、学校生活を楽しむことができるようになる。台湾の生徒たちは、積極的に話しかけてくれ、日本人学校の生徒を大切にしてくれる。言葉が通じなくても一緒にバスケットボールをしたり、校内のコンビニエンスストアに一緒に買い物に行ったりと交流を楽しむ様子が見られるようになる。1日9時間授業にも慣れ、昼寝の時間もぐっすり眠れるようになる。

体験の最終日は、お別れ会を開いてもらったり、手紙をたくさんもらったり、写真をとったりと、現地校の生徒と最後の交流を楽しむ。日本人学校の生徒は現地校の中学生の優しさにふれ、「まだ新民校で勉強したい」と名残惜しい気持ちで現地校の生徒と別れる。体験後の日本人学校の生徒たちは、この1週間を乗り切ったこと、たくさんの台湾の友達と交流できたことで大きな充実感に満たされる。



新民校の生徒と記念撮影

④ 台中日本人学校の生徒・保護者の感想

体験入学は有意義でしたか？との質問に対して88%の生徒が「とても有意義だった」と回答している。

【有意義だった理由（生徒）】

- ・ 台湾の学校で台湾の生徒と一緒に授業を受けることはなかなかできない体験だから。
- ・ 新民校の生徒との会話で、英語や中国語の必要性を感じたこと。
- ・ 自分がどれだけ台湾の学校の授業についていけるかを知ることができた。また自分の中国語で、どれだけ会話ができるのかも分かった。
- ・ 自分が初めての環境でどれだけ耐えることができるかが分かった。自分を思いきり試すことができたことが良かった。また自分から異文化に飛び込むことの大切さを学んだ。
- ・ 新民校の生徒たちの温かさにふれたこと。

保護者は「とても有意義だった」との回答が100%であった。

【有意義だった理由（保護者）】

- ・ 中国語や英語でコミュニケーションをとる経験がとても良かったようで、自信にもつながったようです。
- ・ 台湾でしかできない体験であり、本などからでは得られない貴重な何かを得たはずです。思い出としても一生の思い出になると思います。
- ・ 生徒さんも多いので、たくさんの人との交流ができたと思います。台湾の教育事情を知ることができたのも良かったと思います。

(3) 職場体験の導入

在外教育施設では受け入れ先の問題や、安全面の問題もあり、日本国内のように職場体験を行うことが困難な状況がある。台湾は比較的治安もよく、受け入れ先があれば職場体験ができる状況であった。職場体験を通して、働く意味を考えさせるとともに現地の社会とも交流する機会を設けたいとの校長の意向から私が担当となって職場体験を立ち上げることになった。

受け入れ先を探した結果、台中市にあるエンジェル幼稚園の日本人園児クラスと、台中市の中心部にある百貨店の2カ所が受け入れてくれた。平成19年度、中学部1年（10名）はエンジェル幼稚園へ、中学部2年（11名）は百貨店に体験に行くことになった。初めての試みなので、受け入れ先との調整を図りながら1月の職場体験当日を迎えた。百貨店の日本人スタッフは2人。あとはすべて台湾のスタッフだったので、生徒たちは中国語でコミュニケーションをとりながらの職場体験となった。

初回の職場体験は1日の体験であった。百貨店での体験では、開店前の1時間で挨拶の仕方や基本的マナーを教えてもらい、その後、生徒を3班に分けて、エレベータ係、インフォメーション係、駐車場係を順番に体験していく内容であった。翌年度は、職場体験の日数を2日に延長して、1年目の反省もふまえ、さらに研修内容を充実させていった。

いつも買い物でお客さんとして訪れる百貨店。生徒たちは生まれて初めて働く側に立ち、百貨店はたくさんの人が協力し合って成り立っていることや、仕事の苦労や楽しみに気がつく。また、台湾の現地スタッフに温かく指導され、またお客さんからも話しかけられるなど、現地社会との交流も思い出に残ったようである。

【百貨店での職場体験の感想】

- ・ 中国語での事前研修が大変でした。そのお陰で館内放送やインフォメーションもスムーズにできました。
- ・ エレベータの到着の階を間違えたときお客さんから「加油！」（がんばれ）と励まされました。
- ・ 会社の中にも様々な役割があり、どれか一つでも欠けたら成り立たないということが分かりました。
- ・ アナウンスなどの中国語を話す仕事は緊張しました。体験で学んだことは少しだったとは思いますが得たものはすごく大きかったです。

4. おわりに

台中日本人学校では、他にも社会科見学や、現地の中学校との交流会など、数多く企画運営してきた。多くの人と交流することで、成長していく子どもたちを見ることは自分にとっては大きな喜びであった。「人は人と触れあうことで磨かれていく」と私は考える。特に違う文化的背景をもっている人との交流は大きな学びになる。

3年間の台湾での経験から異文化と接する際に大事だと思うことは、「相手に心をひらくこと」「相手の価値観を尊重すること」この二つである。この二つがないといくら言葉を話せても本当の意味での交流はできないと考える。そのことを教えてくれた台湾の方々、そして台中日本人学校の子どもたちに感謝をしたい。そして台湾で学んだことを日本で生活する目の前の生徒たちにも教えていきたい。